

「地縁」が人をつなぐ

「人とのつながりがなければ、存在しないのと一緒じゃないですか」

NHKが「無縁社会」を特集した番組で、取材を受けた中年の独身男性がそうつぶやいた。彼は東京にある団地で一人暮らし。頼る家族もいなければ、会社とのつながりもない。孤独死が怖くてたまらないという。以前同じ団地で、男性の独居老人が孤独死した。発見されたとき、死後1週間が経っていた。

こうしたケースは跡を絶たないが、人とのつながりを作り出そうという動きもある。「人が自分らしく生き、自分らしく死ぬためには、地域で支える必要がある」という思いから、新たなつながりを提供する高齢者住宅が建設され、話題になっている。

東京都・多摩市にある豊かな自然に囲まれた有料老人ホーム「ゆいま〜る聖ヶ丘」。食堂は住民だけでなく誰にでも開放し、近所に住む親子が食事をする光景がある。建物の遊歩道を小学生が走り抜けていた。

「人に建物を合わせる」というコンセプトのもと、建設前から入居予定者と話し合いを重ね、共につくりあげた。食堂運営と野菜販売はNPO法人「多摩草むらの会」が担い、医療と介護のサービスは地元の医療法人財団「天翁会」が行うなど、地域と密着した施設だ。入居者たちは何でもスタッフに頼るのではなく協力しあって生活する。至れり尽くせりの贅沢なサービスはないが、身近にいるスタッフの存在は安心感を得ることができると評判だ。

「ここは有縁社会と言えるのかもしれませんがね」

と、入居して半年になる栗原靖司さんは言う。体の不調や、娘に世話をしてもらって面倒をかけることへの後ろめたさから高齢者住宅へ移り住むことを考え始めた。食堂に来れば入居者と食事できるため人との交流を楽しんでいる。「元気なうちは皆と過ごしたい。ここに来なかったら…、後悔していただろうね」と朗らかに語る姿が印象的だった。

「私はね、ばっさり捨てたのよ」

と言うのは、「おひとりさま」として一人で暮らしてきた清水さん。死ぬまで一人で生きるつもりだったが、いざ死んだら色々な人に迷惑をかけるのではと心配になり、この老人ホームに入居した。その際、今までの持ち物の半分以上を捨てたと言う。まさに新しい生活のスタートだ。以前の生活とは一変し、「ここでは毎食友人とご飯を食べられるのよ」とにこやかに話す。

ここでの暮らしに彩りを加えるのは、入居者が自発的に行う課外活動である。入居者に

よって寄贈された本を管理する「図書部会」や、歌好きな人たちが集まる「歌声サークル」は、彼らの絆を育む温かな場となっている。栗原さんは図書部会にも参加しており、「利用者が使いやすいように心配りをしてくれる」とスタッフも感心する。こうした入居者の参加無くして、ゆいま〜るの活動は成り立たない。

家族社会学が専門で、高齢者の問題に詳しい慶應義塾大学・渡辺秀樹教授は、『核家族が増加する中、薄れた血縁を復活させることは非常に難しい。ゆいま〜るの取り組みは、今後、高齢者のための新たな『地縁』づくりとして重要なモデルになるだろう』と評価する。高齢者住宅の住民たちが自発的に取り組む活動や、地域の自治体と一体化した施設設計は、高齢者にとって生き甲斐を見つけやすい。彼らはここで、人々との新たな縁を築くことができる。近年では、高齢者と若者の世代間交流の中で高齢者が刺激や活気を得ることを目指す取り組みもある。「ゆいま〜る聖ヶ丘」と同じ事業者が運営する「ゆいま〜る多摩平の森」は、「高齢者住宅棟」と地域の大学生の住む「若者のシェアハウス棟」が併設している。日々の交流や共同で行うイベントなどを通して、世代を超えたつながりをつくり出す新事業として注目されている。

一方で、渡辺教授は高齢者住宅の限界についても言及する。運営団体は資金に限りがあり、低収入の高齢者を受け入れられないという点である。渡辺教授は、政府がこの財源を補うべきであると指摘する。欧米政府が高齢者支援団体を資金面で強力的に支援しているように、日本政府もそうした団体への補助金を増やすべきだと主張する。今後、高齢者住宅のような施設に縁を求める高齢者がさらに増えていくと予想される中で、渡辺教授は、「高齢者住宅だけに限らず、社会性と活動性のある NPO 団体が、地域コミュニティのコーディネーター役を担っていくことが重要になるだろう」と語った。いかに社会が高齢者に対して多様な「縁」のかたちを提供し、それを高齢者自身がどう選び取っていくかが、「有縁社会」への鍵となる。